

を作つて検討しており、
連携して進めたい。

諏訪中央病院名誉院長

かまた みのる
鎌田 實さん人間
発見

地域医療への夢を抱いて赴任した諏訪中央病院。信頼できるスタッフに囲まれ充実した環境だったが、訪れる患者は少なかった。

着任当時の諏訪中央病院は医師や看護師などスタッフは優秀なのに、なぜか患者があまり来ない病院でした。「鎌田、おまえのひげがよくない」と言われたこともありました。がん患者の診察で「親切に診ていただいて、本当にありがとうございます」と感謝の言葉をもらったと思ったら、病室に申し訳ありませんが、手術は他の病院でお願いすることにしました」という書き置きを目にしたこともありました。

「温かい病院」を目指して地域の医療活動に情熱を注いだ



来院患者少なく、ボランティアで地域医療

各家庭回り「訪問看護」「デイケア」発案

39歳で院長に、病院玄関で毎朝あいさつ

者を断らない病院」「温かい治療をしよう」「困っている人を助けよう」ということでした。

当時、病院がある茅野市は脳卒中の患者が多い長野県でも特に多い地域でした。そこで年間80回、ボランティアで地域住民の健康づくりを始めたのです。その指針になったのが、佐久総合病院で地域医療の礎を築かれた若月俊一さん

や「デイケア」などの取り組みをみだった。

各家庭を訪れると「寝たきりの高齢者が多い」「床擦れなどで困っている人が多い」など、病院内で患者を診ているだけでは分からない現実がいろいろ見えてきたのです。訪れた家で一緒に食事をしていくと、塩分を多く取る食事と脳卒中の関係を考えることもでき

の「V・ナロー」(人民の中へ)の言葉でした。そこで生まれたのが「訪問看護」でした。

地域に入る医療活動を通して見えなかった課題。人々が求める医療は何か追究する中で生まれたのが「訪問看護」な人を病院で預かることにしました。

た。病院の始業は8時半でしたが、ぼくが早く出ると職員も早く来るようになる。そこで、職員たちとのコミュニケーションをより緊密に図ることもできました。

病院の新築、在宅看護、デイケアサービズ、看護学校の開校など次々と新たな展開にも乗り出しました。大切にしたのは「地域住民がどのような医療を受けたのか」を考えることです。病室や食堂からの八ヶ岳の眺望を考えて病院を新築したり、デイケアを始めたり、いつも地域住民の声を大切にしてきました。病院内で行うほろ酔い勉強会」などにも積極的に参加していただいています。

「公立の病院であっても健全経営が必要だ」と、院長時代は病院経営の立て直しにも力を尽くした。ピーター・ドラッカーなどの経営書を読む機会も多かった。

ぬくもりある医療貫いて

③

39歳の若さで諏訪中央病院の院長に就き、地域医療の拠点として新たな試みに挑んだ。前任の今井澄さんから「院長をやってほしい」と言われて就任したのは1988年です。院長になったとき、1つのメッセージを病院に勤務する人々に発しました。「温かきでどこにも負けない病院にしよう」と。就任早々始めたのが、毎朝8時に病院の玄関に立つことでした。患者の方々とあいさつをし、感謝の言葉や要望、クレームなどを聞くようにしました。

(聞き手は 榎本誠)